

中国語、日本語、西洋語間の相互伝播と翻訳の プロセスにおける「経済」という概念の変遷

馮 天 瑜
「訳」呉 咏梅

「経済」は現在よく使われる常用術語である。「国民経済」、「経済改革」などの言葉はよく耳にしたり目にしたりする。これら用例における「経済」という言葉は、英語の術語 Economy に対する翻訳語として、旧漢語を借用するもので、社会的生産、配分と消費の総和を指すものである。兼ねて節約、割に合うということをも意味する。しかし、研究してみれば、今日われわれが使い慣れた、上述の新しい意味を担っている「経済」という言葉は、その漢語の古典的意義との隔たりは甚だしいばかりでなく、その語形から今日の意義を導き出すこともできない、「中国語—西洋語—日本語」間の伝播と翻訳の過程において別道に入った言葉の一つであると言えるだろう。しかし、「経済」という概念の変遷は、まさに近代日本人及びそのあとを追う中国人の社会生産や消費、配分、交換等に対する認識が、広範的な政治、道徳理念から抜け出していく傾向を表して

いる。

一 「経済」の古典的意義 II 経世済民

漢語の古典用語として、「経済」は「経」と「済」の合成語であり、語の構成法は連合構造である。

「経」は元々名詞で、甲骨文や金文においては、織機の糸を巻く棒と絢う棒によって横に突っ張った数多くの直線の象形を表している。そして金文では「𦉳」の形をし、紡織の縦糸に似ていて、横糸の「緯」と対応する。『説文・糸部』では「織従（縦）絲也」と解釈している。段玉裁は、「経文従絲謂之経、必先有経而後有緯」と注釈をつける。『周易』において初めて見られ、「阡陌」、こと田の中を縦横に交差するあぜ道を指す。東漢の劉熙は『釈名・釈天芸』において、「経、径也……

如徑路無所不通³」と言う。「経」は後に動詞と転じ、「治」の意味を含むようになり、よく「綸⁴」と一緒に使われる。例えば、『周易・屯卦・象伝』に曰く、「雲雷屯、君子以経綸」。『中庸』曰く、「惟天下至誠、為能経綸天下之大経⁵」。これらのセンチテンスの中の「経綸」は「統治管理」、「正しい道への救済」と解釈できる。それ以外、「経」はまた「略」や「制」と組み合わせ、「経略」、「経制」といった言葉を構成する。意味は「管轄」、「統治管理」に近い。要するに、動詞としての「経」は、意味が「治」と同じである。『周礼・天官・大宰』曰く、「以経邦国⁶」、また『淮南子・原道訓』曰く、「有経天下之気⁷」。この「経国」、「経天下」は、すなわち「国を治める」、「天下を治める」という意味で、「経世」とも言う。「経世」が連用する最初の例は、『莊子・斉物論』にみられる。

六合之外、聖人存而不論、六合之内、聖人論而不議。春秋経世、先王之志、聖人議而不弁。

この「経世」は、王先謙や章太炎の考証によると、莊子の本意は紀世、世紀編年のことを指すのだが、儒教を支援し莊子の思想にも賛同する後世の儒者により、「世を治める、世を救済する」というように解釈された。これは儒教の実社会に入るべきとされた「入世主義」と関連があり、道教の浮世を離れるべきと主張する「出世

理念」とは合わないと思う。儒家の学術が全体をリードする時代においては、「経世」はまさに「世を治める、世を救済する」儒教の意志を以ってこそ、後世に伝わり、広く使われたのである。

「済」は「斉」とお互いに通用仮借することができ、整然・調和の意味を持っている。「済」は水偏に従っているから、「渡」と解釈できる。意味は川を渡ることである。そこから派生して、済はまた「救助、救済」の意味にも用いられ、「済民」という言葉を構成したのである。例えば、『尚書』には「以済兆民⁸」といった句がある。

「経世」は「済民」と連合して「経世済民⁹」や「経世済俗¹⁰」などの連語を成した。例えば、晋の葛洪（二八一？—三四一？）は、『抱朴子・明本』において、「経世済俗之略、儒者之所務也¹¹」と説く。同書にはまた「以聡明大智、任経世済俗之器¹²」という句がある。隋唐以降、「経世済民」などの連語は次第に流行語となる。例えば、唐の高祖李淵（五六六—六三五）が発布した告示の中には「経邦済世¹³」というフレーズが現れた。この語はまた「経済」という言葉を生む母体となる。遠い例を言うと、唐の太宗李世民（五九九—六四九）の名前は、「経世安民¹⁴」の意義から取っている。近い例は、辛亥革命の武昌一揆の重要な参加者蔡済民（一八八六—一九一九）の名前をあげることができる。氏の名前はなお直接に「経世済民」の後ろの両文字を取ったものである。

「経世済俗」、「経世済民」の略語として、「経済」という言葉は、

西晋の時代に最初に見られる。『晋書・長沙王乂伝』によると、「八王之乱」の間、長沙王・司馬乂（二七七一—三〇四）が弟の成都王・司馬穎（二七九—三〇六）に手紙を寄せて、「同産皇室、受封外都、各不能闡敷王教、經濟遠略」¹⁵という。『晋書・殷浩伝』によれば、東晋の簡文帝（在位三七一一—三七二年）が殷浩（？—三五六）宛の手紙の中に、「足下沈識淹長、思総通練、起而明之、足以經濟」¹⁶と高く評価している。『晋書・紀瞻伝』によると、東晋の元帝が紀瞻を表彰する詔書の中に、「瞻忠亮雅正、識局經濟」と称する。袁郊は、『甘沢謡・陶峴』において、王峴氏に対して「峴之文学、可以經濟」と評価する。隋の王通（？—六一七）は、『中説・礼楽篇』において、当時の一人の儒家名門を次のように賞賛する。

是其家伝、七世矣、皆有經濟之道。¹⁹

王通のこの段落は、数多くの辞書類により「經濟」という言葉の最初の出所としてよく引用されているが、実のところ、上述の歴史書籍の中の「經濟」用例よりは三世紀ほど遅れている。

唐代以降、「經濟」の使用頻度は日増しに高くなる。例えば『唐書』の『玄宗本紀』は次のように称える。

廟堂之上、無非經濟之才。²⁰

李白の『嘲魯儒』には、

魯叟談五經、白髮死章句。

問以經濟策、茫如墜煙霧。

と言う詩がある。

杜甫の『水上遣懷』には、

古來經濟才、何事獨罕有。

の句がある。

『宋史・王安石伝』には、

朱熹論安石、以文章節行高一世、而尤以道德經濟為己任、被遇

神宗、致位宰相。²¹

と書いてある。

昔の有名な対聯に曰く、

文章西漢兩司馬、經濟南陽一臥竜。²²

すなわち、司馬遷と司馬相如の文学才能を賞賛し、諸葛亮の国を管理し天下を安定させる（経済）能力を称えるものである。

『宋史』は事功派士人に対して度々「経済」で以って評価する。例えば、『宋史・葉適伝』は葉適氏に対して「志意慷慨、雅以經濟自負⁽²³⁾」と説く。『宋史・陳亮伝』は陳亮氏のことを「志存經濟、重許可⁽²⁴⁾」と書く。

『紅樓夢』の中に、賈政が賈雨村のことを「氏は經濟を心がけている」と称え、自分の息子の賈宝玉が色事に熱中し、「經濟」のことを勉強しないとしかりつける。

右に挙げた文句の中の「經濟」は、皆「經世済民」、「經邦済国」の略書きで、政治を行うものが「国を管理する」、「人民を助ける」ことを意味し、「政治」の意味に近い。もちろん、昔の「經濟」は国家の財政、国家の經濟と人民の生活という意味も含まれている。例えば、明の劉若愚が著書『酌中志』・卷七の中に、万暦年間の司礼秉筆（筆を執る）太監陳矩のことを、「是以有志經濟、每留心国家歲計出入⁽²⁵⁾」と論及する。しかし、国家の歳入歳出のことに留意したり、国の經濟や人民の生活に関心を持つたりすることは、依然として經邦済国的一部分であるから、ここの「經濟」は伝統的な意義から離脱してはいない。

「經濟」と意味が近い言葉の「經略」、「經制」などはよく官名に使われていた。例えば、唐、宋、明、清は辺境要地に防衛警備の軍事

長官として、「經略使」を設置した⁽²⁶⁾。宋と明の時代には、東南地域の財政と租税を管理する「經制使」という官職がある。「經濟」が官職名となったのは、金の「經濟使」がある⁽²⁷⁾。

趙靖の『中華文化通誌・経済学誌』や葉坦の『中国経済学』尋根の研究によると、「經濟」が本のタイトルになったのは、宋と元以降に常に見られるそうで、例えば、宋の劉顔は『經濟格言』を著し、馬存は『經濟集』を著作し、滕拱は『經濟文衡』を編集し、元の李士瞻氏は『經濟文集』を書いた。明になると、「經濟」を書名にするものがより多く現れた。例えば『經濟文輯』、『皇明名臣經濟録』、『經濟類編』、『經濟言』、『經濟文鈔』、『經濟名臣傳』、『經濟宏詞』、『經濟總論』などがそれである。清時代にはさらに『皇朝經濟文編』、『皇朝經濟文新編』がある。明清時代に勢いよく現れた数々の「經濟文編」は、両朝の時代に次々と出てきた「經世文編」の内容と編集の体例とがきわめて近い。その多くは、經世済民の方策をまとめるもので、財政、工商などの面における具体的な内容、例えば財計、賦役、屯田、塩法、茶法、河渠、漕運、工虞、貨殖などの種類を含め、「經濟文編」の主体となった⁽²⁸⁾。

晩清になっても、「經濟」という言葉はまだその古典的な意味を踏襲する。曾國藩（一八一―一八七二）は大いに「義理・經濟の合一論」を提唱し、道光二三年（一八四三）正月の時点ですでに『致諸弟』という著書の中で、伝統儒学の「義理の学」、「考証の

学」、「辞章の学」のほかに、「経済」の学問を加えるべきだと主張した。ここでの経済とは、経邦済国の実学のことである。その後、曾國藩は同治八年（一八六九）に『勸学篇・示直隸士子』を著し、孔子教を義理、考証、辞章、経済の四科目に分ける。さらに、『求闕齋日記類抄』巻上の「問学」編において、次のように詳しく論述する。

有義理之学、有詞章之学、有經濟之学、有考拠之学。義理之学、即『宋史』所謂道学也、在孔門為徳行之科。詞章之学、在孔門為言語之科。經濟之学、在孔門為政事之科。考拠之学、在今世所謂漢学也、在孔門為文学之科。此四者闕一不可。²⁹⁾

曾國藩は、「経済の学」を儒教の政事科目に挙げて、理学の経世の機能を強調する。ここの「経済」は、「政治を管理する、国を治めて天下を安定させる」といった意味を含んでいるが、国の経済や人民の生活に関する実学はその重要な展開部分である。咸豊、同治、光緒時代を通じての、曾氏の多大な影響と時勢の要求により、「経済の学」は晩清になると次第に士人たちが研鑽する学問となり、その言葉自体も速やかに世の中に伝わり、広く使われるようになった。

清の光緒二四年（一八九八）五月、即ち戊戌変法の前夜、湖広総督張之洞（一八三七—一九〇九）と湖南巡撫陳宝箴（一八三一—一九

〇〇）は、一緒に『妥議科挙新章折』という建白書を奏し、科挙の八股文を廃止し、その代わりに中国の史事、国朝政治論を内容とする「中学経済」や各国の地理、学校、財政、兵制、商務、刑法などを内容とする「西学経済」を取り入れるべきだと主張した。³⁰⁾ 同一年、貴州学政嚴修（一八六〇—一九二九）は、「中外の情勢を通曉する」人材を選抜するための経済科目を設立するよう上奏した。しかし、戊戌政変のため、この議論は棚上げにされ、清末の新政になってようやく再議される。光緒二十七年七月（一九〇一年八月）、清政府は、八股文を廃止し、科挙試験の中に「経済特科」、「経済正科」を設け、政略で以って時事を論じるという詔書を發布した。経済特科は、一九〇三年に実行され始め、皇帝は保和殿で経済特科の人材に対して自ら試問を行った。清末新政の主宰者である張之洞は「経済特科採点大臣」を担当したことがある。経済特科の試験内容は「中学経済」と「西学経済」を含み、その「経済」は依然として経邦済国、経世済民のことを指すが、すでに中国と西洋の国を管理すること（財政、貿易、交通などを旨とする）についての新しい内容を含んでいた。これは清末科挙制度の改革運動における一つの重大な進展である。八股文を科挙試験の舞台から退かせたことは、実際に一九〇五年に科挙制度を廃止することの先駆けとなっている。

清末に中国に入ったプロテスタントの宣教師も伝統的意味での「経済」を使っていた。例えばアレン³¹⁾ (Y. John Allen 一八三六一—

九〇七)は一八七五年十月(光緒元年九月)から『万国公報』で「中西關係略論」の論説を連載し始めた。その最初の連載文「論謀富之法」の中にすでに「講求堯舜禹湯之經濟」といったセンテンスがある。³³『万国公報』第四九七卷(光緒四年六月)には匿名氏の「閱愛中華三書」を掲載した。その三冊目の本には「天下万国之中、中華多經濟之才」という句があり、後文には「經濟」という言葉が繰り返して登場し、例えば、「此本為当強之經濟」、「經濟須預儲也」、「当実求其經濟」、「雖有經濟而無近益」などがある。同誌の第五三卷には、「稍知時務者」という署名をした「勸士習当今有用之學論」⁴⁰の文章が掲載され、其の中には「大学問」、「大經濟」などの言葉がある。西洋の宣教師が主宰した『万国公報』の中に「經濟」という言葉が多く現れ、みな「經世済民」、「經邦済国」の意味を指して、古代漢語の固有な意味から脱していない。

二 日本は古代から古典意味の「經濟」を踏襲してきたが、近世になるとその經濟論は国家の經濟と人民の生活に重点がおかれた

「經世済民」を意味する「經濟」という言葉は、漢籍と一緒に日本に伝わってきた。近世(江戸時代)になると、「經濟」をタイトルとする書籍は少なからず出版された。例えば、古学派の太宰春台

(二六八〇—一七四七)は、『經濟録』⁴¹の冒頭に「經濟」の意味を次のように示している。

凡そ天下国家を治むるを經濟と云ふ。

堯舜より以来、歴世の聖賢、心を尽くして言を立て、教え垂れ給うは、皆、此の經濟の一事の爲め也。

蘭学者青木昆陽(二六九八—一七六九)の『經濟纂要』、江戸末儒学者海保青陵(二七五五—一八一七)の『經濟談』、神道と洋学を「混同」させた佐藤信淵(一七六九—一八五二)の『經濟要録』、及び中井竹山(二七三〇—一八〇四)の『經濟要語』、古賀精里(二七五〇—一八一七)の『經濟文録』、正司考祺(二七九三—一八五七)の『經濟問答秘録』などの著作の中で論じられている「經濟」という言葉は、みな「經国済民」の意味とその展開された意味である。例えば、佐藤信淵は『經濟要録』第一五巻において、「所謂經濟とは、天地を經營する神意にして、世界の人類を濟救する業なり」と述べている。

佐藤信淵は、また『經濟問答』の中で、「經濟とは、国土を經營し、万貨を豊饒にして人民を濟救するの道なり」と公示している。彼が述べているのは依然として經世済民の政治論であるが、その重点は物質財産の創造と分配においている。このような国の經濟と人

民の生活への検討に力を入れる経済論は、まさに江戸時代の空談や無駄な議論を正す実学の精神が非常に興隆していることの表われであり、「経済」という言葉が近代的な意味へ転換する趨勢をも予示している。

江戸後期の洋学は、その経済論がますます国家の経済と人民の生活に対する探求に傾いていくばかりでなく、西洋科学や生産技術を学ぶことをも論議の中に導入するようになった。洋学者本多利明（一七四四—一八二二）は『経世秘策』を著し、国政における四大急務を指摘する。その四大急務は即ち、第一硝石（硝石を発掘し、岩石と暗礁を砕いて、水陸交通を開通すること）、第二諸金（金銀銅鉄鉛などの鉱物を採掘して、国の用途として使うこと）、第三船舶（造船と海運を發展させ、天下の物産が流通できるようにすること）、第四属島の開発（周辺の島々を開発し、特に北部辺境を拓殖すること）である。本多利明の「経世」という言葉は、まだ古代漢語の「経邦濟世」の意味を取っているにもかかわらず、「経世」の内容は、すでに物質生産、流通、交換、配分などの面にわたって展開され、西洋の科学技術を勉強すべしという主張も含んでいる。本多利明はまた『経済放言』という文章も著している。そのうち「贅説篇」は、家屋や道路、橋梁の建築、また石材や鉄材の利用で、どう西洋の方法をお手本にするかを議論し、また「経済総論」篇では物産を増殖して、人民の衣食住の需要を満たすことを論じ、「海国」としての日本がこ

の問題を解決する道は海外貿易を拡大することにあると指摘する。以上から、江戸時代における日本人の経済論は、依然として経世済民の政治論であるにもかかわらず、その重点はすでに国家の経済と人民の生活にかかわる物品の生産、流通、交換と配分に置かれ、しかも開放的な色彩を帯びていることが分かるだろう。

これは、中国でも近世日本に類似して、宋元以降、経世実学の発展にしたがって、「経済」という言葉がますます国家経済と人民生活の内容に関する内容を含むようになった。もちろん、すべての内容は皆「経世済民」という総まとめの中に含まれている。即ち、「経済」は国を治めるといふ政治的な課題に従属するようになった。

江戸時代の日本では、「経済」という名目の下で国家経済と人民生活の問題を議論するほか、「富国」という言葉も常に使われていた。林子平（一七三七—一七九三）は本多利明よりも早く国家の経済と人民の生活に関心を寄せ、『富国策』という文章を著し、貧富の問題を論じている。林子平の文章のタイトルは中国宋代李覯（一〇〇九—一〇五九）の『富国策』を真似たものである。もちろん、「富国」という言葉にはもっと遠い源がある。司馬遷は春秋時代管仲が斉を治めたことに対して、「通貨積財、富国強兵」と称した⁴³。戦国時代の荀子にはさらに「富国」と題する専門的な論文がある⁴⁴。一八六〇年代末、清の京師同文館では「富国策」のカリキュラムが設けられ、アメリカ人宣教師マーチン（W. A. P. Martin 一八一

七一・一九一六)により講義された。イギリス人宣教師エドキンズ (Joseph Edkins 一八二二—一九〇五) は、『富国養民策』を著した⁽⁴⁶⁾。日本においては、啓蒙学者福沢諭吉(一八三四—一九〇一)が明治一八年(一八八五)に「富国策」と題する論文を書いた⁽⁴⁷⁾。

以上から、近代においては、中日の士人・文人及び中国にきた西洋の宣教師は競い合って論著を「富国策」と命名し、国家経済や人民の生活について検討し、西洋の術語 Political economy の対訳語として用いたことが窺えるだろう。

「経済学」は、古代の中国にはすであつた言葉である。唐の嚴維は詩に曰く、「還將経済学、来問道安師⁽⁴⁸⁾」。これは割合に早い例である。宋の朱熹は『陸宣公奏議』という本を評論して、「此便是経済之学⁽⁴⁹⁾」という文を書き残した。『元史』卷一七二の中にも「経済之学」という語がみえる。明清時代の歴史書の中に、その当時の人を論う場合、常に「当務経済之学⁽⁵⁰⁾」、「好講経済之学⁽⁵¹⁾」といった言い方をする。そしてよく「経済之学」を「性命之学」、「義理之学」、「掌故之学」などと一緒に、学問の一つの類別として並べる。前述したように、清末の曾國藩は、義理之学、考証之学、詞章之学のほかに、「経済之学」を加え、士人が学ばなければならない科目であると考えていた。これら「経済学」、「経済之学」の用例は、みな「経世済民之学」を指し、すでに次第が増えていく国家の経済や人民の生活に関する内容も含んでいたが、いずれも汎政治的、汎倫理的な紋切

り型を乗り越えることができなかつた。江戸中期まで、日本の経世学者が用いる「経済学」という言葉は、大体中国明清時代の「経済学」の意味と類似し、江戸末期になって初めて変化が生まれた。これは西洋術語の伝来と関係がある。

三 古代ギリシャから現代の欧米に至るまでの

Economy という言葉の本来の意味、その変遷及び定着

漢字文化圏における「経済」という言葉が、「経世済民」という古典的意味から社会の生産関係の総和、即ち国民生産、配分と消費の総和という意味に転じ、節約や割に合うという意味も兼ねるようになったのは、近代日本人が英語の Economy の訳語として「経済」を使った近代になってからのことである。しかし、西洋においては、Economy という言葉はかなり複雑な発展プロセスを歩んできた。

英語の Economy はギリシャ語の *οικονομικός* から変化してきたものである。紀元前四世紀、ギリシャの思想家クセノフォン (Xenophon) が『経済論 (*οικονομικός*)』を著した。タイトルの中の *οικονομία* は「家族」の意味で、*νομός* は本来の「法律・法則」または「支配」という意味から、「経営」という新しい意味が派生した。両者が組み合わされると、「家政」、「家計管理」、「家族経営」

を意味する新しい単語が生まれた。ゆえに、クセノフォンの著作は『家政学』または『家政論』とも訳された。これは西洋文化における Economy という言葉の源である。クセノフォンより半世紀遅れて生まれたアリストテレス (Aristotélès : B.C.三八四—B.C.三二二) は、経済学の課題を「財をなし、富をもたらす術」を研究することと定め、奴隷の配分を含む資源の配分にかかわり、富を致す道を家庭の財産管理と都市国家の管理の二種類に分けているが、前者こそ自然で正当なものだと指摘した⁽⁵²⁾。要するに、西洋においては、Economy の「家政学」の意味が歴史も古く、意義も深い。しかし、次第に変化していくのである。

中世に至ると、古典的な都市国家がなくなつたにもかかわらず、国及び邦を封じる政治的な統治は相変わらず家計管理 (economy) と切り離され、中国古来の「身一家一国一天下」が一体であり、「修(め)る(、) 齊(ま)る(う)、治(め)る(、) 平(ら)げる(、)」が完備した一つの過程であるという観念とは大きな隔りがある。故に、古代漢語の「経済(経邦済国)」という概念の領域は、ヨーロッパの古典時代と中世に使われた Economy (家政、家計) より大きい。

一六世紀に、Economy には法律的意義が加えられ、Economy (家政学) は農学と結合され、多くの農村貴族に勉強されるようになった。Economy はまたキリスト教の神学と結び付けられ、「神の代理」という意味合いを持っていた。一七世紀には、Economy

は Political (政治的) という言葉と結合するようになり、次第に「家政」の意味から「国家の統治と管理」の意味に拡大されるようになった。例えば、フランス初期の重商主義者モンクレティアン (A. de Montcheuven 一五七五—一六二二) が一六一五年に出版した *Political Economy* のタイトルは『国家の秩序と統治』と意訳することができる。この本において、モンクレティアンは、この書は「国王や皇太后さまに捧げる政治経済学である」と言明した。モンクレティアンは自分の論議はすでに家庭生活や家族管理の範囲を超え、社会の管理から国家の経済と人民の生活にまで広く行き渡り、中には国を治め天下を安定させる政治内容が含まれているから、「君主のご高覧」のために供する読み物であるゆえ、「政治経済学」と称すると論じている。

一八世紀になると、ヨーロッパでは経済学に関する論著が次第に多くなつた。啓蒙思想家ルソー (J. J. Rousseau 一七一二—一七七八年) はフランスの『百科全書』のために「政治経済学」という項目を書いた。ルソーは古代ギリシャの「家政学」と区別して、政治経済学の、国を管理し人民を安定させる内容を強調した。古典派経済学者のアダム・スミス (Adam Smith 一七二五—一七九〇)、リカード (David Richardo 一七七一—一八二五)、マルサス (Thomas Robert Malthus 一七六六—一八三七)、ミル (John Stuart Mill 一八〇六—一八三七) などみな「政治経済学 (Political Economy)」

という言葉を使った。例えば、リカードが一八一七年に出版した代表作のタイトルは、*On the Principles of Political Economy and Taxation*〔政治経済学と課税の原理〕である。マルクスは『政治経済学批判』を著したこともあるし、その大作『資本論』のサブタイトルも「政治経済学批判」である。

一九世紀の英語圏では「*ics*」のあとに *ics* という語尾をつけて標準的な学教科目にしたほうがよいとする提案で、*Economics* という言葉が現れた。一八四三年に創刊されたイギリスの著名な週刊誌 *The Economist* (『経済学者』) は、*Economics* (経済学) という言葉の普及を推進した。一九世紀の後期になると、西洋の経済学と政治学との区分が次第に明らかになり、経済学は専門的に社会生産と消費の問題を研究する学問となった。例えば、シェヴォンス (W. S. Jevons 一八三五—一八八二) は一八七〇年代の末期に、*Economics* が *Political Economy* (政治経済学) に取って代わるべきだということを提案した。イギリス経済学者のマーシャル (A. Marshall 一八四二—一九二四) は一八九〇年に *Principles of Economics* (『経済学原理』) を出版し、はじめて「経済学」で書名を命名した。その後、*Economics* (経済学) と *Political Economy* の分野が次第に分かれていく。

一九世紀初期以降、経済生活の進展に伴って、*Economy* (経済) の内包がますます細かくなっていく。イギリスの経済学者ミル

(James Mill 一七七三—一八三六) は『政治経済学要義』においてはじめて「経済」の生産、分配、交換、消費といった「四分法」を提唱した。その後、マカロック (J. R. McCulloch 一七八九—一八六四) にも『商業辞典』の中で似たような論説があった。これで、経済の今日的意義が大体定型化された。

イギリスの学者マクレオット (Henry Dunning Macleod 一八二一—一九〇二) は、著作 *Economics for Beginners* (『経済学入門』) において、*Political Economy* と *Economy* (*Economics*) の学理的な区分を行った。彼は、*Economy* は即ち *Economics* と、ギリシヤ語から来ており、「各種の財産」と「法」という二通りの意味を持ち合わせていると指摘した。アリストテレスによれば、*Economy* は「歳入の招集法」で、「王家的、方向的、政治的及び家政的」の意味を持つという。Politie は、ギリシヤ語の中では「自由邦国の意味」である。故に、*Political Economy* は、「自由邦国、歳入を招集する方法である」。Economics に対して、マクレオットは、「物品を交換し得る相互関係を重んじる支配方法の学、あるいは価値の学、時には富を求める学と称する」と定義した。³³⁾

赤坂亀次郎はこの書の第二版(一八七九年)に基づき、第四版(一八八四年)を参考にして日本語に全訳し、『麻氏財理学』というタイトルで、一八八九年十二月に東京の集成社から刊行した。原著に影響を受けて、赤坂も *Political Economy* を *Economy* (Eco-

nomics)と区別させ、前者を「経済学」、後者を「財理学」と翻訳した。彼は「凡例」において、経済学(ポリチカルエコノミー)は政治上の関係で富を論じる名称で、財理学(エコノミックス)は経済と関係がなく、ただ富を論じるものであると述べる。さらに、彼は「ポリチカルエコノミー(Political Economy)を経済学に訳したのは、日本の一般慣例であるが、エコノミックス(Economics)を経済学と区別するのは、まだ聞いたことがない。自分がそれを財理学と訳し、その訳が正しいかどうかまだ知らない」と述べた。原著者がEconomicsを「富の学」、「形而下理学」と見ているから、「財理学」とは、富に関する理学(哲学)であらう。⁽⁸⁴⁾

総じて見れば、西洋の経済学の理念は「否定の否定」という発展のプロセスを歩んだ。古代と中世においては、家計、家政の学(Economy)は都市国家と国家政治の学(Political)と分かれ、近代の初中期に至ると、両者が次第に結合され、政治経済学(Political Economy)の名目のもとで発展を遂げた。一九世紀半ば以降、工業文明、商品経済の成熟に伴って、経済学は新しいレベルで政治学と分かれ、それぞれ発展していく。Economicsは政治学に付属する地位から離脱し、政治経済学(Political Economy)から分離され、国家経済と人民の生活にかかわる問題を議論する専門の学問となり、社会生産、分配、消費と交換がその研究対象となった。漢字文化圏にある日本と中国は、Economyを翻訳した時期には前後の区別が

ある(日本は一九世紀の中期、中国は一九世紀の末期二〇世紀の初め)。一九世紀の後半以降、西洋はEconomyの含まれた概念が「政治経済学」から「経済学」へ変化することを経験していたため、両国の学者のEconomyに対する理解はことごとく同じではない。故に漢語の訳語の選択に際しても両国の判断が異なっているのだ。

四 幕末から明治にいたる間に、日本ではEconomyを「経済」と訳し、「経済」の意味がそれ以前と変わってしまった

Economyという言葉は物質生産、消費、交換といった意味のほかに、長い間Politicalと同様に用いられ、政治的管理の意味も兼ねてきた。幕末と明治期(一九世紀半ばごろ)はちょうど「政治経済学(Political Economy)」という名目が欧米で流行していたころであり、日本人がその言葉にふさわしい邦訳語を探した際に、「経邦国」の意味を持った「経済」という言葉を選んだのも、自然の成り行きと言えよう。前にも述べたように、この訳語はまた江戸中期以降日本における経世実学的发展で、「経済」がますます「国家の経済と人民の生活」という意味合いを深めていったことに直結している。

Economyが日本で初めて「経済」と翻訳されたのは文久二年

(一八六二)に出版された『英和对訳袖珍辞典』である。この辞書は、初めてeconomistを「経済学者」に、Political Economyを「経済学」に訳している。同じ年、啓蒙学者西周(一八二九—一八九七)がオランダ留学直前に松岡鱗次郎に寄せた手紙の中で「経済学」という言葉を使い、次のように述べる。

小生頃来西洋之性理之学、又経済学杯之一端を窺候処、実ニ可驚公平大之論ニ而、

手紙のコンテクストから見ると、ここに挙げた「経済学」は古代漢語の伝統的な意味の「経邦济世之学」というより、寧ろ「性理の学」⁽⁵⁶⁾と並列する西洋学問の一種である。しかし、手紙の中には詳しく議論を展開していなかった。

文久三年(一八六三)、西周は津田真道と一緒にオランダに留学し、法学博士シモン・フィッセリングに師事した。フィッセリング博士は授業内容を文書に書いて、二人に示した。文書の中には「政事学」を五つの科目に分けて、「一曰く性法之学、二曰く万国公法之学、三曰く国法之学、四曰く制産之学、五曰く政表之学」⁽⁵⁷⁾という。この五科目の今日の訳名は自然法、国際公法、国法学、経済学と統計学である。西周はStatshuishoudkunde(国家財政学)を「制産学」と対訳し、「制産学は、富国安民の術なり」⁽⁵⁸⁾と解釈している。

しかし、「記五科授業之略」の訂正本『五科口訣紀略』において、西周はフィッセリング文書の中に示した五科目を「一曰く性法学、二曰く万国公法学、三曰く国法学、四曰く経済学、五曰く政表学」⁽⁵⁹⁾と翻訳している。当時、西周は「制産学」と「経済学」という二つの訳語の間でどちらに決めるか躊躇していたことが窺えるだろう。

少し遅れて、在日のアメリカ人宣教師ヘボン(J. C. Hepburn 一八一五—一九一一)は慶応三年(一八六七)に編纂した『和英語林集成』という辞書の中で、Political EconomyのEconomyを「経済」と対訳した。

千種義人によれば、西洋の経済学を日本に紹介した最初の書物は神田孝平(一八三〇—一八九八)の『経済小学』⁽⁶⁰⁾である。幕府の著書調所や開成所の教授であった神田は、明治初期に『経世余論』を著し、「経世済民」という伝統名目のもとで殖産、貿易などの問題を論じており、一八六七年にイギリス人ウイリアム・エリス(W. Ellis)の *Outlines of Social Economy* ⁽⁶¹⁾を邦訳した。エリスの原本は一八五七年にオランダのフィッセリングによって蘭文に翻訳された。その蘭訳のタイトルは *Statshuishoudkunde* である。神田はそのオランダ訳から日本語に重訳して、これを『経済小学』と名づけて出版したのである。タイトルからも分かるように、神田は *Social Economy* の蘭訳である *Statshuishoudkunde* (国家財政学) を「経済」と訳したのである。『経済小学』の序文において、神田

は、西洋の教育は「教科、政科、理科、医科、文科の五科」があり、そのうち政科は「民法、商法、刑法、国法、万国公法、会计学、経済学」の七つに分けられ、その七番目が「経済学」であると紹介している。この書は一八六八年に『西洋経済小学』と書名が変更、再出版され、西洋の術語を対訳する漢語も多く創製された。例えば「求取（現行の訳は需要。以下の括弧内は現行の訳）、金館（銀行）、工人または雇作（労働者）、財主（資本家）、作業（労働）、相迫（競争）、品位（価格）、利分（利潤）」などがそれである。もちろん一番重要なのは「経済」である。当書にはまた「経済的学」という言葉もあった。これは「経済学」という科目名に近い。

『経済小学』は漢字文化圏の中で比較的早く新しい意義の「経済」でタイトルにした本で、Economyを「経済」と対訳する先駆的な書物である。

明治初年には、「経済」で命名する著書と訳書がすこぶる多かった。例をあげると、次のとおりである。

『経済原論』、箕作麟祥、緒方儀一訳、明治二年（一八六九）出版。

『経済説略』（英語版）、明治二年（一八六九）出版。

『経済堯言』、長江受益著、明治五年（一八七二）出版。

『経済便蒙』、何礼之訳、明治五年（一八七二）出版。

『経済新説』、室田充美訳、明治六年（一八七三）出版。

『泰西経済新論』、高橋達郎訳、明治七年（一八七四）出版。

『百科全書 経済論』、堀越愛国訳、明治七年（一八七四）出版。

『経済要旨』、西村茂樹訳、明治七年（一八七四）出版。

『経済学講義』、大森鐘一訳、明治九年（一八七六）出版。

前述した、「制産学」と「経済学」の間で迷っていた西周は、明治一〇年（一八七七）前後に正式に「経済学」を使うようになった。

今日の意味での「経済」及び「経済学」が広く日本に伝わっていたのは、また福沢諭吉の訳述と関連がある。文久二年（一八六二）、福沢が渡欧し、一八五二年にスコットランドで出版されたチエンバーズの *Political Economy: for Use in Schools, and for Private Instruction*⁽⁶²⁾ を購入した。慶応三年（一八六七）、福沢はこの本を『経済書』と邦訳し、後の『西洋事情』外編巻之二―三に収めた。『経済書』の「経済の総論」⁽⁶³⁾ において、福沢は *Political Economy* を「経済」と訳したり、「経済の学」と言ったり、「経済学」と呼んだりしていた。そして「経済学」を次のように定義している。

経済学の旨とするところは、人間衣食住の需要を給し、財を増し、富を致し、人をして歓楽を享けしむるに在り。往古の碩学、始めて経済のことに付、書を著し、之を富国論と名づけり⁽⁶⁴⁾。

福沢はまた総論の中で、経済学が古代ギリシャの「家法」⁽⁶⁵⁾ から国家や国民の生計に関する学問に変化してきた歴史⁽⁶⁶⁾ を遡っている。ス

コットランドの経済学者J・R・マカロックの論述を引用し、一種の「学文⁽⁶⁷⁾」として、「経済とは、物を産し、物を製し、物を積み、物を散じ、物を費すに、その紀律を設る所以の学文にて」と指摘している。福沢はまた未定稿『経済全書』巻の一の総論において、経済学の下位科目を、第一制産、第二交易、第三配分、第四消耗の四つに分けた。これは、「経済」四分説、即ち生産、交換、分配、消費のまとまった記述である。

これと類似して、中江兆民（一八四七—一九〇二）が一八九二年に書いた『四民の目ざまし』の中にも「生産、分配、消費」という経済の三分説がある。

福沢も中江もジェイムズ・ミルなどをはじめとするヨーロッパの経済学者の経済四分説あるいは三分説を伝達していたことが分かる。今日用いられている漢字術語「経済」に含まれた「国民生産、分配、交換、消費の総和」という意味は、ミルの論説に源があり、日本の訳書の仲介によって、次第に漢字文化圏に広く受け入れられるようになり、「経済」という言葉の中に国民生産、消費、流通などの新しい意味を注ぎ込んだのである。

『経済書』のなかで、福沢は「経済学」のほかにも、たびたび「経済的学」という連語を使った。一八六八年に福沢は、アメリカの経済学者ウェーランド (Francis Wayland 一七九六—一八六五) の *The Elements of Political Economy* の一部分を『経済学要論⁽⁶⁸⁾』と

して邦訳し、総論で経済学の意味を検討している。福沢はここで *Political Economy* を「経済」と訳し、また次のように説明している。

経済とは富有の学なり、或は之を富国学の義に用ることあれども、まだ其学義を尽くすに足らず。蓋し富有を致すの法は一人に於けるも亦一国に於けるも其趣意に異同なければなり。

福沢の『西洋事情』及びその外編、二編は幕末から明治初期にかけて広く読まれたため、訳語の「経済」と「経済学」も速やかに世に広まった。また福沢は『学問のすゝめ』初編（明治五年刊行）、『啓蒙手習之文』（明治四年刊行）などの論著の中にも「経済学」を使い続け、違う側面からこの術語を定義づけていた。

言及に値するのは、「経済」という言葉の「儉約」の意味の誕生である。一八六二年に出版された堀達之助編纂の『英和对訳袖珍辞書』では、*Economy* の意味を「家事の法、儉約の法」と解釈している。即ち家計をつかさどるための節約方法である。これはより早く「経済」に「節約」という意味を与えた例である。この「儉約」の意味は、英語 *Economy* の一つの意味から来ている。

『英和对訳袖珍辞書』に続いて、福沢は家庭の経済問題を論じ、『経済』の「儉約」の意味を説明するとともに、これを普及させた。

著書『民間経済録』の中で「居家の経済」を論じている。この本は明治一〇年（一八七七）に刊行され、一五、六歳の少年を対象に、経済貯蓄の三大要は「儉約のこと」、「正直のこと」、「勉強のこと」であると説教し、「一椀の冷飯、一筋の灯心、決して粗略にはいけない」、浪費してはいけないことを強調し、「質素儉約」で細々と財産を積み立てることを提唱している。もちろん、福沢は経済の儉約論者ではない。彼は、自由主義経済思想を受けているから、「我輩の主唱する節約論は唯方今の官途社会に向て勧告するのみにして、爾余の人民一般に対しては寧ろ豪奢を勧めざるを得ず」、「人民の豪奢は寧ろ之を勧む可し」と主張する。つまり、福沢はすべての人に対して勤儉論を唱えるわけではないのである。物質商品の生産者はひたすら節約するのをやめて、もっと消費すべきだが、官僚や学者などの消費者は儉約しなければならないと主張している。福沢は一八七〇年に著した『西洋事情』二編の「収税編」において、貧民の生活に欠くべからざる必要品は無税或いは税をきわめて軽くすべきで、それに対して奢侈に属するものは、さらにその税を重くし、国の財政収入を増やすべきだと主張している。⁽²⁾

明治一三年（一八八〇）に、福沢はまた『民間経済録』二編を著し、「処世の経済」を説明し、社会の一員になろうとする一八、九歳の男女に対して、公共の財を集めてまたこれを消費する「財物集散」のことを論議している。福沢にとって、「経済の要」は「財物

の集散」の際に余ったものを「人間の利益」として積んで富をなすことである。福沢は、「放奢淫逸妄りに財を費や」すことは、損失ばかりの散財であるが、「儉約の一方に偏」って、財物を集めるには「質素儉約」の方法しかないと考えて、財物のみを惜しみ、粗食少食を忍ぶことも、真の利益にならないと指摘している。つまり、福沢は財物を散ずること（即ち消費）と集めること（即ち収入）がお互いに適当であること、消費生活と生産活動がバランスを保って、経済を促進させ、「人間の利益」を保証しなければならないと主張している。福沢の経済思想は、近代西洋の「プロテスタント倫理」における儉約や勤労により富を増殖させる資本主義の精神と一致しているだけでなく、自由主義経済論の色彩も帯びている。

福沢と同時代の学者の中には、「経済」を「勤儉節約」と解釈する者が多い。例えば、岡田良一郎（一八三九—一九一五）は明治六年に「勤儉論」⁽³⁾を書いていて、中江兆民も「勤労儉約」の意味で「経済」を論じている。

今日の中国語の中によく使われている「経済」⁽⁴⁾「節約」の意味は、「経済」という言葉の古典的意義ではない。その源を遡ると、『英和対訳袖珍辞書』の中の「経済」に対する解釈、特に福沢論吉が著した『民間経済録』の初編と二編の中での「経済」の「儉約」の意味に対する解明まで追跡しなければならない。

明治年間、現代的意味で「経済」や「経済学」を使った者には、

啓蒙学者津田真道（一八二九—一九〇三）がいる。彼は一八六八年に刊行された『泰西国法論』の中に「経済の学」という語を使い、それを「良好なる財利の法」と解釈する。福沢諭吉の弟子、慶應義塾の塾長だった小幡篤次郎は、訳書『英氏経済論』において、多くの側面から「経済学」の範囲を定めている。明治六年（一八七三）、林正明がミリセント・フォーセット夫人（Millicent Garret Fawcett 一八四七—一九二九）の小著『初学者のための経済学』を『経済入門』と訳し、一八六七年神田孝平の訳書『経済小学』に次いで、再び「経済学」を書名に入れた。明治一〇年（一八七七）、永田健助がフォーセット夫人の同書を『宝氏経済学』と翻訳した。明治年間にも名声を博した『明六雑誌』の中に掲載された津田真道などの文章でも、度々 Political Economy を「経済学」と訳している。

明治期に「経済」をタイトルとする新聞と雑誌も登場した。例えば、明治一三年（一八八〇）に犬養毅が三菱会社の朝吹英二の援助の下で創刊した『東洋経済新報』は、貿易保護論を鼓吹する。それに対して、田口卯吉（一八五五—一九〇五）が明治一一年（一八七八）に刊行した『自由交易日本経済論』は、日本人が書いた最初の近代的意味での経済学専門書で、自由主義の経済論である。田口卯吉はまた『東京経済雑誌』を創刊し、経済の自由主義を宣伝する。要するに、幕末から明治にかけて、日本人は次第に社会の物質生産、消費、理財及び儉約、割に合うという意味で広く「経済」とい

う言葉を使うようになり、この言葉は「政治管理」という古典的意義から離脱したのである。それに、明治期の日本は、すでに欧米のさまざまな経済学学派の論著が翻訳され、貿易保護論も自由主義の経済論も論じられていた。

一八八〇年代以降、日本で邦訳されたり伝達されたりする西洋の論著は、「経済学」と題するものが多かった。一九〇二年に、アドム・スミスの『国富論』を宣伝するために、梁啓超が『生計学学説沿革小史』を著した。敵復によって翻訳されたスミスの『国富論』は、筋道が入り組み分かりにくいため、梁氏は日本人が翻訳したさまざまな経済学の書物を参考にして、総合的な解釈を試みた。梁啓超の主な参考書物は、イングラム（Ingram）著・阿部虎之助訳の『哲理経済学史』⁽⁷⁶⁾、ユッサ（Luigi Cossa）著・阪谷芳郎重訳の『経済学史講義』⁽⁷⁷⁾、井上辰九郎の『経済学史』⁽⁷⁸⁾などがある。以上は明治中期以降、「経済学」という名目で出版された書籍の一部分である。

まとめて言うと、幕末から明治にかけて、日本は次第に広く Economy を「経済」と対訳し、「経済」という言葉をその古典漢語の「経世済民」義から離脱させるばかりでなく、漢字表記が示しうる意味の外にも遊離させた。この翻訳語やそれによってもたらされた経済学の物質化主義傾向に対して、日本でも批判は少なくなかった。例えば、経済史学者山崎益吉が『横井小楠の社会経済思想』⁽⁷⁹⁾の序章において、「経済は経世済民、経国安民のことで、元々は

『大学』の八条目の治国平天下論であるが……近代以降、経済の真の意味が忘れられ、単純に財物や合理性を追求するような意味になり、本来の面目が失われてしまった」といった主旨を述べた。山崎は、明らかに翻訳語としての「経済」に「経世済民」の古典的意義が捨てられたことは、言葉を歪めただけでなく、経済の学説が国を治め人民を安定させることを考慮する大義からはずれ、物質の富を追求しその合理性を論証する道に入ったことを意味すると指摘した。もちろん、近代日本は直ちにEconomyの邦訳語を「経済学」に統一したわけではない。例えば、西周は一八六二年の手紙において「経済学」という言葉を使っていながら、一八六三年オランダ留学の時では、交替で「制産学」と「経済学」の両方を使った。さらに、西は明治三年（一八七〇）私塾育英社の講義⁽⁹⁾において、中国の經典『孟子』の「制民之産」という言葉に従って、再び学科名の「制産学」を解釈し、Economyを「経済学」と翻訳するのはふさわしくないとし、「制産学」がもっとも古典漢語の意味と西洋語の意義との間の橋渡しとすることができるとして、「制産学」と訳すべきだと主張する。西は、『百学連環』の中で次のように指摘している。

イコノミーなる語は……人生々活の道を得て富有に至るの意なり。之を唯イコノミーとのみ言ふときは一家のことにあたると雖も、今ホリチカルイコノミーといふときは即ち国家の制産

に係はるところなり。近来津田氏世に之を訳して経済学と言へり。此語は経世済民より採り用へたる語にして、専ら活計のことを論ずるには適當せざるに似たり。故に余は孟子の制民之産の語より採りて、制産学と訳せり⁽¹⁰⁾。

その後、西周は明治七年（一八七四）に刊行された『人世三寶説』において、金銭や富、貯蓄流通を論じる時には「経済学」を使った。これは肯定的にEconomyの訳語としての「経済学」を認める証拠である。しかし、同じ文章の中に、また「彌爾氏の利学」という言葉がある。ここでは、西周はイギリス学者Millの経済学を「利学」と読んでいる。ここから、一八七〇年代まで、西周がずっと訳語として「経済学」、「制産学」と「利学」などの言葉の間で躊躇していたことが窺えるだろう。西周にとって、「経済学」はPolitical Economyの理想的な翻訳語ではないようである。

福沢は「経済学」という翻訳語の創始者と使用者である。前述したように、福沢は早くも一八六七年の『経済書』においてPolitical Economyを「経済学」と対訳していた。そして一八六八年には、また自分で創立した慶應義塾（現在の慶應義塾大学）にてアメリカ人ウエーランドのThe Elements of Political Economy⁽¹¹⁾を『経済学要論』と翻訳して、教材にした。しかし、それと同時に、新しい術語「経済」、「経済学」の創出者である福沢は、また度々「理

財」、「理財略」、「理財方略」、「理財法」、「理財の法」などの言葉を使って、生計活動及びその関連の学説を指している。⁽⁸⁴⁾ その「理財」の言葉は、『易经・系辞下』の「理財正辞」から採っていて、富や財産に対する有効的な運用を意味している。近代日本の学者の中には、「理財」を著作のタイトルにする者が少なくなかった。例えば、中村正直が安政五年（一八五八）に「論理財」の文章を書いている。⁽⁸⁵⁾

おそらく福沢の意図によるのだろうが、慶應義塾では「理財科」が設けられていた。明治二三年（一八九〇）、その文学、理財と法律の三学科は大学部に統合され、慶應義塾大学の基礎となった。しかし、慶應義塾大学の経済学部は一九三〇年代になってはまだ「理財学部」と称されていた。日本最初の国立大学である東京大学の状況もほぼ同じであり、その経済学部の前身は文学部の理財学科で、大正九年（一九二〇）に「大学令」が發布されて初めて、「理財科」が「経済学部」に取って代わっている。

そのほかに、大蔵省記録局が明治十一年（一八七八）に編纂した紙幅のおびただしい政令法規集『徳川理財会要』では、「理財」という言葉が踏襲されている。⁽⁸⁶⁾ 井上哲次郎（一八五五—一九四四）らが一九一二年に編纂した『哲学字彙』第三版の中では、依然として Political Economy を「経済学」、「理財学」と翻訳し、注の中に漢籍の言葉「文中子云、是其宗待、七世矣。皆有経済之道。易系辞云、理财正辞」を引用している。現代に至っても、日本の辞書ではまだ

Economy の多様な中国語訳名を論じている。例えば、『広辞苑』第五版⁽⁸⁷⁾では、「経済学」は Political Economy 及び Economics の訳語であると示され、その定義は「経済現象を研究する学問で、旧称は理財学である」と書かれている。ここから「理財学」は、過渡的な訳語として、長い間日本で使用されていたため、近年出版された辞書においても経済学は「理財学」であったと明記されなければならない事情が窺えるだろう。

上述から、「経済」と意味が近い言葉、例えば「制産学、利学、富国学、理財学」などは、長期にわたって日本で使われていたことや、経済、経済学が標準の術語になるまでには、日本でも短くない期間（一八六〇年代初期から九〇年代末まで）を要したことが分かるだろう。

五 Economy の日本語訳である「経済」は、清末の中

国学者からあまり認められず、「富国策、富国学、計学、生計学、平準学、理財学、財学、資生学、軽重学」などと対訳された

幕末から明治にかけての日本で Economy の訳語が多く生まれたことと同様に、清末の中国でも、Economy に対する翻訳の試みが多く行われた。しかも、日本語訳よりもまちまちであり統一した訳

語がなかった。

Economyの最初の中国語訳は、京師同文館が一八六〇年代末に設立した経済学の科目名である。講座担当者のアメリカ人プロテスタント宣教師のマーチンは、科目名を「富国策」⁽⁸⁸⁾と定め、イギリス人フォセット⁽⁸⁹⁾(Henry Fawcett 一八三三—一八八四)が一八六三年に出版した『経済学教本』(Manual of Political Economy)を教材に使った。この本は後に同文館の副教習汪鳳藻により中国語に翻訳され、マーチンの監修で『富国策』という書名で一八八二年に同文館により刊行された。

一八八五年に、イギリス人のプロテスタント宣教師フライヤー⁽⁹¹⁾(John Fryer 一八三九—一九二八)がチェンバーズ兄弟(William and Robert Chambers 錢伯斯兄弟)の自由主義経済の著作 Political Economy⁽⁹²⁾を翻訳し、書名を『佐治言』と定めた。「佐治」の意味は「経国济世」と同じである。訳書の中に、「経済学」は「佐治之学」、「理財之律学」と表述され、「伊哥挪米」とも音訳されている。

一八八六年、中国に來たイギリス人プロテスタント宣教師エドキンス⁽⁹³⁾は、イギリス人ジェブンス⁽⁹⁴⁾(W. S. Jevons 一八三五—一八八二)が一八七八年に刊行した The Theory of Political Economy⁽⁹⁵⁾の第二版を中国語に翻訳した。訳文は最初に『富国養民策』のタイトルで『万国公報』に連載され、後に単行本として税関総財務司により出版された。この本の中では、「経済学」は「富国養民学」と翻訳さ

れ、意味は「富国策」に近い。

陳熾(？—一八九九)は一八九六年に『続富国策』を著し、イギリス古典経済学者アダム・スミスの『国富論』を受け継いだ論著と公言する。当時の人々は『国富論』を『富国策』と誤って伝えていたから、陳熾はアダム・スミスを追跡しようとする自分の論著を『続富国策』と命名し、この本の目的は「踵英而起(英国の後について立ち上がったもの)」であって、中国を豊かな国にするように促進することにあると宣揚する。

日清戦争前後、中国の学者は「富国策」、「計学」、「平準学」、「理財学」、「資生物学」、「軽重学」、「生計学」、「財学」などの名称で Economy と Economics を翻訳した。清末の全国の教育を管理する中央官署・学部は審査により、Economics の中国語訳を「富国学」と定めた。

梁啓超(一八七三—一九二九)は一八九六年より「理財、節儉、合算」という意味での「経済」という言葉と「経済学」という学科名を紹介し始める。梁はその年に刊行した『時務報』第14号の文章中で「日本自維新三十年来、広求知識於寰宇、其所著有用之書不下数千種、而尤詳於政治学、资生物学(即理财学、日本謂之経済学⁽⁹⁷⁾)と述べている。翌年、梁啓超は『変法通議・論訳書』を著し、「富国学之書」という名詞の下に「日本名爲経済書(日本では経済書と呼んでいる)」と注釈を加えた。日本に亡命する前までの梁は「資生

学、理財学、経済学」を併用しているが、「資生学、理財学」を主な言葉として、「経済学」を補助的な解釈名詞として使っていたことが窺えるだろう。

一九世紀の末期まで、中国人知識人はよく「経世済民」の意味で「経済」という語を使っていた。新語を使うのが好きな康有為さえも同様である。例えば、康有為の『日本書目誌』第五卷「政治門」の中に、「凡六経皆経済之書（一般に六経はみんな経済についての本である）」の議論がある。また、一八九八年の戊戌変法期間中、康有為は北京で「経済学会」を設立した。この二箇所の「経済」は、依然として「経世済民」の古典的意義を取っている。

割合に早く肯定的に日本語訳の「経済」を使ったのは、日本亡命後の梁啓超である。梁は一八九九年に日本で「論近世国民競争之大勢及中国之前途」の論文を著し、「故其之争也、……非屬於政治之事、而屬於經濟之事（故に、其の競争は、……政治の事に非ず、経済の事なり）」と論じ、「経済」を「政治」と対照させた。ここでの「経済」はもう「経邦済国」の意味でなくなっている。これに対して、梁は「用日本名、今訳之為資生（日本名を使用しているが、現在これを資生と訳す）」と解釈した。その頃の梁は日本人が翻訳した Economy の訳語「経済」を受け入れ始めてはいたが、完全には認めていないようだ。梁は、やはり「資生」の言葉を推奨している。

一九〇〇年に、梁は『中国之社会主義』の中で日本人が邦訳したマ

ルクスの言論を引用している。

麦喀士曰…現今之經濟社会、実少数人掠奪多数人之土地而組成之者也。⁹⁸

これは新しい意義で「経済」を使用したものである。しかし、梁は一九〇二年二月に発表した「新民説・論進歩」において、アダム・スミスが近代の新しい経済学説を創始したことに言及した。梁曰く「斯密破壊旧生計学、而新生計学乃興（アダム・スミスは古い生計学を破壊してはじめて新しい計学が生まれた）」。ここでは「生計学」が使われ、「経済学」の訳語が回避されている。ここから、梁啓超が日本亡命後、日本語訳の「経済」と自分の訳語「生計」との間で躊躇していたことが分かるだろう。

嚴復（一八五四—一九二二）は、日本語訳の「経済」という言葉に対して、よりはっきりとした拒否態度を示していた。嚴は、一九〇一年にアダム・スミスの『国富論』を翻訳し、訳書名を『原富』と定めた。嚴はまた『訳事例言』を著し、日本人が Economy を「経済」と訳することに批判を加え、「計学」と翻訳すべきだと主張し、そして次のように理由を述べた。

計学、西名葉科諾密、本希腊語。葉科、此言家。諾密、為最

摩之転、此言治。言計、則其義始於治家、引而申之、為凡料量經紀摶節出納之事、拓而充之、為邦国天下生食為用之經。蓋其訓之所苞至衆、故日本訳之以經濟、中国訳之以理財。……經濟既嫌太廓、理財又為過狹。自我作故、乃以計学当之。……故《原富》者、計学之書也。

敵はまた一九〇二年に梁啓超との文通「与新民叢報所訳原富書」のなかにおいて、「計学」という言葉の出所に触れている。

再者計学之名、乃從Economics字祖義着想、……又見中国古有計相、計偕、以及通行之国計、家計、生計諸名詞。窃以謂欲立一名、其深闊与原名相副者、舍計莫從。

ここから、敵が「計学」という言葉を作ったこと、そのため頗る知恵を絞ったことが窺えるだろう。敵は、「計学」は「計」という漢語の古典的意義に相応しく、英語のeconomicsの「祖義」に合うと思つて、自信満々であった。ここで、敵復は漢語と英語との対訳の原則を示している。即ち、漢語と英語の伝統的意義（祖義）をともに配慮し、できるだけ両方に通じる漢語を訳語として選択し、新しい名詞を本来の意味と一致させることによって、二種類の言語の通訳を成り立たせる。敵復の「計学」という訳語は後世にまで伝

わることがないが、彼が指摘した翻訳の原則は正しいものである。百年たった今でも、依然として人を承服させる。これはまさに先哲の至言であつて、決して忘れるべきではない。同じ時期、陳昌緒も「計学」を採用し、自分の著作を『計学平議』と命名した。

梁啓超は基本的に敵復の「計学」の訳語に賛成していた。梁が一九〇二年に編著した『生計学説沿革小史』は、敵訳「計学」のもとで、「経済学」を「生計学」と翻訳したものである。

要するに、敵、梁などのような清末民国時代の中国学者は、Economicsという学科名詞を「経済学」と対訳することにあまり賛同せず、ずっと古代漢語の中からEconomicsと意味が近い言葉を探していた。「計学、生計学」のほかに、梁啓超は「平準学」を使つたことがある。「平準」という言葉は、漢代に実施された「平準法」から採つている。その意味は『史記・平準書』の中に詳しく書かれている。「平準法」の目的は小作農を豪商の独占による災いからまもることである。朝廷は市場の物価が低い時に生活用品を購入し、物価が上昇する時に特価で売り出すことによって平民の生活を保障する。「平準」という言葉は後に物価を抑える意味から財政政策という新しい意味へと発展し、今日の「経済」の意義の一部に近づいている。

上述した中国人の努力は辞書の中にも現れていた。一九〇三年に、汪榮宝と葉瀾が『新爾雅』を編集したとき、「計学」の名目を保留

すると共に、「計学」を次のように定義していた。

論生財、析分、交易、用財之学科、謂之計学、亦謂之経済学。
俗謂之理財学。

ここでは、「計学」を条目の主語にし、経済学や理財学を補佐的な説明語にしていたが、「経済学」の条目は設置しなかった。

日本の東京帝国大学に留学したことのある胡以魯(？—一九一五)は、一九一四年に「論訳名^(註)」を著し、日本の新名詞が中国に導入されたことに対して、総体的に肯定的な評価を下したのだが、一部分の訳語は意味が通じないとも指摘した。胡は「不宜襲用、防淆乱(踏襲すべからず、混乱を防ぐためなり)」と主張していた。「亟宜改作(速やかに修正すべき)」日本語訳名として、胡は特に「経済」、「場合」、「治外法権」などの例を挙げている。ここから、日本語訳の「経済」という言葉は、「不合吾国語法(わが国の文法に合わない)」から、「不宜襲用(踏襲すべからず)」という主張は、清末民国初期の中国人学者の普遍的な見方であることが窺われる。

六 民国初期に日本の経済学書籍の影響及び孫文の提唱により、Economicsの訳語は数多くの訳語から「経済」に定着した

清末から民国初期において、Economicsの中国語訳名は音訳と意識が併用され、幾つかの訳語が同時に存在する局面を呈していた。音訳には、嚴復が訳した『原富』の「業科諾密」のほか、「愛康諾米」「伊康老米」などがあった。意識には、プロテスタント宣教師が訳した「富国策」、「富国養民策」、「理財之律学」、中国人が訳した「平準学」、「計学」、「生計学」、「軽重学」、「理財学」、「財学」、「資生学」、「軽重学」などが存在し、統一できない状態にあった。これらの訳語はほとんど中国の古典から出たもので、前掲の「平準」「富国」がそれである。また、「理財」という言葉の出典は、『周易・系辞下』の「理财正辞、禁民为非曰義」で、宋代以後流行語となっていた。王安石は当時「患貧」の原因について、「理财未得其道」とした^(註)。南宋の葉適にも、「古之人未有不善理财而為聖君賢臣者也」という論^(註)があった。従って、「理財」は古代漢語の中では財政を管理する通用語で、それを使ってEconomyを訳するのは、意味が近いといえる。梁啓超は「史記貨殖列伝今義」という文章の中で、経済学を「『大学』理財之事」と解釈し、経済学者を「理財

之学者」としたほどであった。

二〇世紀の初期に、Economyの訳名が、数多くの訳語から「経済」に定着したのは、漢訳の日本書籍（特に日本の経済学教科書）の強い影響と関連している。一九〇一年に留日学生が編纂した『訳書彙編』の中に掲載された「経済学史」の一文は、日本の訳語「経済学」を採用したものである。一九〇三年日本の学者杉栄三郎（一八七三—一九六五）は京師大学堂の経済学教習に招聘された。杉は『経済学講義』を編纂し、中国の教壇で「経済学」を講義し、今日的意義の「経済」と「経済学」という言葉を普及させた。また、同年に商務印書館が日本人持地六三郎の『経済通論』を翻訳して出版した。その後、王璟芳が一九〇五年に山崎覚次郎の著作『経済学』を訳した。一九〇六年に王紹曾は山崎覚次郎が講義した『経済学講義』を翻訳した。清末に翻訳された西洋の経済学論著も、日本語の訳語を借りて書名を決めた。例えば、朱宝綬は一九〇八年にマクヴァン^(註) (S. M. Macvane) の著作を訳し、『経済原論』と命名した。一九一〇年に熊嵩熙などがテリイ (R. Taly) の本を訳し、タイトルを『経済学概論』とした。

ほかの日本を源とした新語が中国で迅速に流行り出したことと違って、「経済」の一語は辛亥革命前後になっても中国人の間に広く受け入れられなかった。その理由として、この語の新しい意味は古典的意味と相当離れているばかりでなく、語形からも当該新義を導

くことができないという欠点があったからである。梁啓超、嚴復など当時の学界重鎮たちを含む、多くの中国人学者は、度重ねてEconomicsの意味に相応しい適切な漢語を探していたので、「経済学」は長期にわたって「理財学」、「富国策」、「計学」、「生計学」などの言葉と併用されていた。また前述のように、日本の近代啓蒙思想家福沢諭吉や西周なども、「経済学」を使ったにもかかわらず、満足はできなかった。福沢諭吉は「理財学」、西周は「制産学」が気に入っていた。漢字文化圏における中日両国のトップレベルの学者はみな別の訳語を探した事例から、Economyを「経済」と翻訳するのはあまり理想的なことではないと窺えるだろう。

「経済学」が中国において、その他の訳名に取って代わって通用術語になったのは、清末民国初期の日本書籍（とりわけ日本の教科書）の影響のほかに、孫文をはじめとする革命派の文化宣伝および実践にも関連する。日本で編輯し出版された革命派の新聞紙『民報』はよく日本の訳語「経済」を使っていた。孫文（一八六六—一九二五）、朱執信（一八八五—一九二〇）等の文章も今日的意義の「経済」を使用していた。民国初年、孫文はことさら「経済」という言葉を、「富国策」、「理財学」といった言葉に取って代わることを提唱した。孫文は一九一二年八月に北京で『社会主義之派別与批評』^(註) という題目で講演する際に、「Economy」の訳名について、次のように述べている。

按経済学、本濫觴於我国。管子者、経済家也、興鹽漁之利、治齊而致富強、特當時無経済学之名詞、且無條理、故未能成爲科学。厥後経済之原理、成爲有統系之学説、或以富国学名、或以理財学名、皆不足以賅其義、惟経済二字、似稍近之。経済学之概説、千端萬緒、分類週詳、要不外乎生産、分配二事。生産即物産及人工制品、而分配者、即以所産之物、支配而供人之需也。

孫文は、また一九二二年一〇月に上海中国社会党での演説の中でも、同じ主旨の話をしたが、その演説の中には、しばしば「経済学」、「経済学家」、「経済主義」、「経済学の原理」などの言葉が出ていた。

民国初期以後、「経済」と「経済学」は次第にEconomyとEconomicsの通用訳語となり、社会生産、交換、分配、消費など意味を含むようになり、古典義の「経世済民」、「経邦済国」と袂を分かつた。しかし、経済学という訳語が富国策、計学、理財学などと呼ばれた。用される期間は民国時代になつてもかなり長く続いていた。アメリカに留学した中国最初の経済学博士馬寅初（一八八二—一九八二）は、一九一四年にイェール大学で書いた博士論文において、「経済学」の代わりに「富国策」、「計学」を使い、「経済学」という訳語に対して保留的な態度を示していた。およそ一九二〇年代以後、

「経済」および「経済学」はようやく統一した術語として普遍的に学界と社会に受け入れられ、通用されるようになった。馬寅初のその後の著作も、『中国経済改造』、『経済学概論』、『戦時経済論文選』、『馬寅初経済論文集』などと命名された。中国早期のマルクス主義者李大釗（一八八九—一九二七）は、一九一九年に『私のマルクス主義観』を著し、日本語訳のマルクスの著書から『経済学批評序文』⁽⁵⁾を翻訳したことを述べた。文中の「経済学」はもちろん日本語訳を使ったのだろう。

七 語義学と歴史学のつながりから「経済」の得失と時

代的意味を考える

今日的意義の「経済」（国民生産、分配、交換、消費の総和、ならびに節約、割に合うの意味を指す）は、すでに定着し、学界だけでなく、民間でも普及しているもので、変えることは難しいだろう。しかし、指摘しなければならぬのは、「経済」という言葉に含まれた今日の意味は、語義学と語彙の形成方法から見れば、たくさんの欠点があるということである。

漢字の多義性により、漢字の熟語は往々にして、同じ語形の中に多岐の意味が含まれている。そのため、古代漢語の熟語を借りて西洋の概念を訳すには、常に意味の拡大、縮小、派生、もしくはすべて

てが変わるといふ事態さえ発生する。これは漢字の古典語が新語に生まれ変わるための要件である。しかし、この種の拡大、縮小、派生、全変は、漢語語彙変化のロジックに従ってはじめて人々の理解のうえで使用され、使用の中で理解されるのである。

常用旧漢字から新しい意味を生み出す方法は、原語の古典的意義を出発点にして、その外延を拡大させたり縮小させたりして、その元来の意味を転じさせることである。例えば、「教授」という言葉は、そもそも動詞で、知識の伝授を意味するものである。宋代以降、それが偏正構造の熟語となり、学校の試験を司る学官のことを指すようになった。「教授」の今日的意義は Professor を訳すときに獲得したもので、特別に大学教師の中の最高職をさすのである。この新しい意味は、原義の合理的な派生と言ってもいいだろう。また、「物理」というのは、古い意味では「事物の理」を指す。今の「物理」は、Physics を翻訳するときに獲得した意味で、分子以上の物質の変化規律^(註)を対象とする自然科学の一分野を指す。この言葉の意味の変化もロジックに従っている。また、「歴史」の古典的意義は史書のこと、過去の事実に対する記述のことを指す。今日の意味は History を翻訳するときに得たもので、自然界及び人類社会の発展過程、或いは歴史学科を指すのである。この種の意味派生は、理解しやすい。「組織」の古典義は「紡織」のことである。現在の意味は soshiki を訳すときに獲得したもので、体の器官を構成する

単位の意味と転じ、さらに社会におけるある種の任務とシステムによって結合された集団 (Organization) を表わすようになった。古今意味の変化はおびただしいが、語形が提供した意味空間から今日の意味を見つけることができる。とにかく、これらの漢字熟語の古典的意義と現行の意義との間には普遍的と専門的、広いと狭いという区別、或いは意味が変化したことがあるにもかかわらず、新旧意義の間には遺伝と変異間の内包した張力が存在している故に、使用者は少々考えれば、両者間の変遷軌跡を見つけることができる。そして言葉の意味の発展や西洋語と中国語との対訳に際して心得ることができよう。

漢字熟語の意味変化のもう一つの方法は、「借形変義(形を借りて意味を変えること)」である。この方法の要領はつまり、言葉の語形を保留するが、元来の意味を捨て、言葉の構成法を変えることによって、新しい意味を生み出すことである。たとえば、古典語の「民主」は、偏正構造の名詞として、「民の主」の略語で、「君主」の意味に近い。英語の Democracy の対訳語としての「民主」は、主語述語の構造となり、「人民が自主する」という意味に変化した。人々がもっていた「民主」の語彙構成に対する弁別が、偏正構造から主語述語構造に変わること、言葉の意味が「民の主」から反対の「人民が自主する」に派生していった。漢字文化に詳しい人にとっては、このような調整と変化を行うことは、それほど難しいこと

ではないのである。

しかし「経済」という言葉を振り返ってみると、その今日的意義は古典的意義と懸け離れただけでなく、語形からも、言葉の構成法を変えても、今日の意味を引き出すことができない。今の国民生産、分配、交換、消費の総和及び節約、割に合うなどの意味は、外から「経済」という漢字熟語に加担したものであるから、新しい術語の「経済」は漢字としての言葉構成の根拠を失った。これは中国の学者嚴復・梁啓超・胡以魯・馬寅初らがこの訳語を認めたがらず、「計学」などの熟語で取って代えようとした所以であった。日本の学者西周が「経済学」に代わる「制産学」という訳語を作った。また福沢諭吉は「経済学」という訳語の創始者の一人であるにもかかわらず、その訳語に満足できず、「理財学」という言葉に傾いている。その原因もここにあっただろう。

しかしながら、同じ漢字文化圏に属する日中両国は、前後して「経済学」をEconomicsの訳語として選んだ。その間の理由は、語義学と歴史学の交錯点を通して観察しないと、分からないだろう。

「経済学」以外の近代中日両国で作られたEconomicsの各種の訳語、たとえば「計学」、「生計学」、「平準学」、「資生学」、「軽重学」、「理財学」、「富国学」、「制産学」などを見ると、類似した性質があることが分る。それはすなわち、それらの言葉は皆ある漢語の古典語（例えば「計」、「平準」、「資生」、「軽重」、「理財」、「富国」、「制産」

など）を軸にし、その古典的意義を出発点として新しい意味を派生させるものである故に、語形と言葉の意味は一致している。つまり、語形からその意味を推測できるので、割合に漢字語彙の構成根拠が充分にある。しかし、なぜそれらの漢語はEconomicsの訳語の正統な地位を占めることができなかったのだろうか。筆者は、それらの言葉には言葉の構成の根拠は十分あるものの、一つ共通の弱点が存在していると思う。つまり、これらの言葉はそれぞれ、人々の物質生活のある側面しか表すことができないから、全貌を含むことには足りないということである。嚴復は『原富』の「訳事例言」の中で、Economicsの訳語として、「理財又為過狭（「理財」という言葉が狭すぎる）」と言っている。考えてみれば、嚴復のこの批判は、「理財学」に適用できるばかりでなく、実に上述した諸語（嚴復自身が作った「計学」をも含む）の共通した弱点に的を的していると思う。それらの言葉が示した意味は、生産であり、消費であり、分配であり、管理であるが、人類の物質生活の全体を含むことができないので、Economicsの理想的な訳語にあてるとは難しい。しかし、「経済学」は嚴復に「既嫌太廓（意味が広すぎる）」と責められたにもかかわらず、統合力に富んでいるため、最終的に歴史によってEconomicsの訳語として選ばれたのである。

前述のように、訳語「経済学」には概念の古今転倒、語形と意味との離脱といった重大な欠陥が存在し、合理的な漢字術語ではない

ので、学科の発展にある種の不便をもたらしている。例えば、この学科史を遡るとき、古典的概念と今日 concepts、東洋の概念と西洋の概念との間には隔たりがあり、骨を折って解釈しなければならぬ。これについては、中国社会科学院経済研究所の研究員葉坦が「中国経済学尋根」という文章で深く分析している。

一方、もし語義の変遷を歴史(特に思想史)背景の下において考察すれば、次のことも言えるだろう。つまり、幕末、明治間の日本学者は「経済」で Economy を翻訳すると、「経済」を「国を治め天下を安定させる」、「経世済民」の政治的、倫理的「大義」から離脱させ、物質財富の創造、交換、分配などの意味(儉約の意味もその中に含まれている)を新しく与えた。このようにして、社会の物質生産、生活という最も重要な実際問題は、検討の中心を、「義」から「利」に転じるようになった。これは、社会の価値観指向が古典的な「軽利重義」から近代の実利主義に転向していくという時代精神の変化を示したものである。

近代工業文明には多重の精神的支柱がある。実利主義はその重要な支柱の一つである。利益追求、価値法則という「見えざる手」は、近代工業文明を推し進める強大な力である。近代工業文明が実利主義を大いに拡張させた歴史事実は、国計民生に関する学問としての Economics を近代西洋で誕生させ、次第に政治的な従属地位から離脱させたのである。Economics はこのような近代学問として、

一八、九世紀の欧米で生まれ、世界中に広がった。東アジアで言えば、日本は率先して一九世紀の半ばごろにこの学科を設置した。これは日本の「開国」と工業文明に進むこととほぼ同時に進化したものである。「東洋のルソー」といわれた日本の啓蒙思想家中江兆民は、経済の近代的意義を鋭く観察し、一八八八年に「一九世紀以前、経済は政治の付属品であった。しかし、この付属品はいまや必需品に変わった」と指摘している。中江兆民の言葉からも、「経済」という言葉の意味が近代日本において変化していることが窺えるだろう。

中国では、一九世紀末に日本を仲介して西洋の近代経済学を取り入れはじめた。敵復は直接ヨーロッパの論著からこの学問を中国語に翻訳していた。しかし、前述のように、清末の時期にはまだ統一した術語が形成されなかった。二〇世紀初期^⑧になってはじめて近代経済学が正式に中国に伝わるようになった。「経済」という言葉の意味の古今転換、「経済学」が国計民生に関する学問の共通名になったのは、このような歴史プロセスにおいてのことである。

敵復・梁啓超ら近代中国の学者は、語義学の立場から、訳語の「経済」に不満を持ち、別訳を Economy の訳語にする試みを行ったのだが、中国人はついに民国初年から「経済」という訳語を受け入れた。表から見ると、これは日本新名詞の強い影響と孫文の提唱による結果にみえたが、実際は時代の流れであるといえよう。つま

り、古典漢語の汎政治的、汎倫理的な「経世済民」の意義は、すでに必要でなくなった。その代わりに、英語の Economy に含まれた「国民生産、消費、交換、分配の総合」の意味は、よりよく現実社会の物質生活の全体状況を反映できるにもかかわらず、対訳できる言葉がないから、古典漢語から「経済」を見出し、対訳するようになった。当然、こうすることによって、人々は語彙の純正性を放棄するという重大な代償を払った。

語義学と歴史学の統一という角度から反省すると、もし当時同じく漢字文化圏に属する中日両国が、もっと適切な語形と意味が一致した漢語を創製し、Economy の含まれた意味を表出できれば、人々の、言葉を見て意味を推測し理解を深めることや、相関学科の成長などに寄与できただろう。しかし、言葉の発展プロセスは「仮に」という条件を相手にしない。言葉の實際運用の過程は次のような現実を示している。つまり、新しい概念が続々とやって来たとき、余裕を持って慎重に語句を推敲する上で訳語を選択することはできないだろうし、時には言葉の構成の原則さえ堅持できなくなり、大衆的な語学実践の流れに押されて前へまっしぐらに進むことばかりに気を奪われるだろう。だからと言って、これは反省の無益を意味するわけでもない。というのは、去る者は追えざるも、来る者はなお為すところあるからである。われわれのなすべきは、次のようなことであろう。

既成術語の変化過程を明らかにし、その成敗得失を分析することによって、今後の新しい概念を受け入れたり新しい術語を作り出したりする時の合理的自覚を促進させ、術語（とりわけ中核術語）の建設をより健全な軌道に乗せるようにして、発展途上の知識のネットワークのために堅実で頼もしい絆を提供することである。

注

- (1) 日本語訳…経は機織の縦糸なり。
- (2) 日本語訳…経文の縦糸は経と謂う。必ずや経が先にあって、その後には緯あり。
- (3) 日本語訳…経は径なり……径路の如く通じない所なし。
- (4) 「綸」は生糸で編んだ繩のことをさすが、そこから筋道があると
いう意味が派生する。
- (5) 日本語訳…忠誠こそ、天下を治める一番大事な術である。
- (6) 日本語訳…経を以って、邦国を治める。
- (7) 日本語訳…天下を治める気迫が有る。
- (8) 日本語訳…以って兆民を救済する。
- (9) 日本語訳…世を治め人民を救済する。
- (10) 日本語訳…世を治め世俗の人々を救済する。
- (11) 日本語訳…経世済俗の計略は、儒者の務めなり。
- (12) 日本語訳…聡明と知慮で以って、経世済俗の役割を果す。
- (13) 『大唐創業起居注』卷一。

- (14) 『旧唐書・太宗本紀』。
- (15) 日本語訳…同じく皇室に生まれて、外都を受封されたが、それぞれ王教を詳しく解釈し広めていったり、世を治め人民を救済したり、先々までの戦略を立てたりすることができない。
- (16) 日本語訳…貴下は見識が深くて博学で、考え方が総合的で熟達している。何か問題が起きると直ちにそれを解明することができる。世を治め民を救済するには十分に才能が足りる。
- (17) 日本語訳…瞻は忠実で正直である。世を治め民を救済する計略をよく知っている。
- (18) 日本語訳…陶峴の文学は、世を治め人々を救済することができる。
- (19) 日本語訳…これは彼の家伝で、すでに七世代に至る。皆それぞれ、世を治め民を救済する方法をもつ。
- (20) 日本語訳…廟堂の上には、経済の才にあらざるものは無い。
- (21) 日本語訳…朱熹は王安石を論じて、王氏の文章と節操は世間の人々より高く、中でも道德や経世済民を己の役目と為し、神宗にめぐり合い、宰相の座に至ったと言う。
- (22) 日本語訳…文章のうまい人材と言えば西漢の二人の司馬氏がいる、国を治める人材と言うと南陽の臥竜の名が挙げられる。
- (23) 日本語訳…志が慷慨である。たいへん己は経世済民の才能があると自負する。
- (24) 日本語訳…志に経済のことが存在しているから、重視してよろしい。
- (25) 日本語訳…そこで、経済のことに志して、度々国の歳入歳出に
- 気をつける。
- (26) 『水滸伝』の中に、八〇万の禁軍を率いる教頭の王進が高大尉の迫害を受け、延安府に夜逃げをした時に身を寄せたのはすなわち小経略使という長官である。
- (27) 『金史・傅慎微伝』を参照。
- (28) 馮天瑜、黄長義著、『晚清経世実学』第十一章「晚清「経世文編」の編纂」、上海社会科学院出版社、二〇〇二年。
- (29) 日本語訳…義理の学があつて、詞章の学があつて、経済の学があつて、考証の学がある。義理の学は、即ち道学で、儒教においては徳行の科目である。詞章の学というのは、儒教の中の言語の科目である。経済の学は、儒教においては政事の科目である。考証の学は、即ちいわゆる漢学のこと、儒教における文学の科目である。この四科目は一つ欠けてもいけないものである。
- (30) 『張文襄公全集』四八巻を参照。
- (31) 中国語の名前は林榮如である。
- (32) 日本語訳…堯舜禹湯の経済を重んじる。
- (33) 『万国公報』三五八巻を参照。
- (34) 日本語訳…天下万国の中で、中国には経済の人材が多い。
- (35) 日本語訳…此れは元々強くなるべきものの経済である。
- (36) 日本語訳…経済はあらかじめ蓄えなければいけないものだ。
- (37) 日本語訳…実際に其の経済を求めろべきだ。
- (38) 日本語訳…長期的・全体的にみれば利益があつても短期的・個人的利益はない。
- (39) 日本語訳…少し時代の趨勢が分かる人。

- (40) 日本語訳…土人が当今の有用の学問を勉強すべきことについての勧め。
- (41) 享保一四年、即ち一七二九年に発行。
- (42) 日本語訳…品物を流通し財産を積む。国は豊かで兵隊は強い。
- (43) 『史記・管晏列伝』。
- (44) 『荀子・富国』。
- (45) 中国語の名前は丁建良である。
- (46) 『万国公報』第四三—八八冊に連載された時期は、光緒一八年から二二年までで、即ち一八九二—一八九六年であった。
- (47) 『福沢諭吉全集』第一〇巻を参照。
- (48) 『全唐詩』巻二六三。日本語訳…なお経済と言う学問を、道安先生にお尋ねしよう。
- (49) 日本語訳…これは即ち経済の学である。
- (50) 日本語訳…経済の学を勉強するべきだよ。
- (51) 日本語訳…経済の学を説明するのが好きである。
- (52) 『政治学』『アリストテレス全集』第九巻、中国人民大学出版社、一九九四年、二二—二三頁。
- (53) 赤坂亀次郎訳『麻氏財理学』集成社、一八八九年一二月、六、七、三九頁。
- (54) 『麻氏財理学』四頁。
- (55) 『西周全集』第一巻、宗高書房、昭和三五年、八頁。
- (56) 後に西周は「哲学」と訳した。
- (57) 西周が一八六三年一月に取ったノート「記五科授業之略」を参照。『西周全集』第二巻、一三四頁。
- (58) 同右書、一三七頁。
- (59) 同右書、一三八頁。
- (60) 千種義人著『福沢諭吉の経済思想—その現代的意義』関東学院大学、一九九四年、一〇頁。
- (61) エリスの英語原著が一八四六年に初出版、一八五〇年に再版された。日本では『社会経済学概論』と邦訳されている(千種、一九九四年一〇月)。
- (62) William and Robert Chambers著『学校及び家庭用の経済学』と直訳することができる。
- (63) 今は「経済の本質」と訳されている。
- (64) 『福沢諭吉著作集』第一巻、慶応義塾大学出版会、二〇〇二年、一八八頁。
- (65) 今日「家政学」と邦訳されている。
- (66) 前掲(64)書、一八八—一八九頁。
- (67) 即ち、学問、科学である。
- (68) 前掲(64)書、一八九頁。
- (69) 『明治文化史 五 学術』(原書房、昭和五〇年、五四八頁)から引用。
- (70) 『経済全書』の一巻で、一八七〇年に発行された『西洋事情第二編』に収録された。
- (71) 明治二九年九月二七日、『福沢諭吉全集』第一一巻、三六四頁。
- (72) 前掲(64)書、二六六—二六七頁。
- (73) 『報知新聞』に掲載されている。
- (74) イギリス古典経済学の伝授者H・フォーセット(Henry Faw-

- (75) 中国語版の訳名は『原富』である。
- (76) 経済雑誌社、一八九六年。
- (77) 森時彦によれば、阪谷が翻訳したのはCossaのイタリア語原著の英語版 *Guide to the Study of Political Economy* (一八八〇)の後半部分 *Historical Part* である。『経済学史講義』哲学書院、一八八七年。
- (78) 東京専門学校出版部、一八九八年。
- (79) 森時彦の「梁啓超の経済思想」(狭間直樹編『梁啓超・明治日本・西方——日本京大大学人文科学研究共同研究報告』中国語版、北京：社会科学出版社、二〇〇一年三月)を参照。
- (80) 山崎増吉、多賀出版株式会社、一九八一年。
- (81) その講義は後に学生に整理され、『百学連環』として刊行された。
- (82) 杉山忠平著『明治啓蒙期の経済思想——福沢諭吉を中心に』法政大学出版局、一九八六年。
- (83) 『政治経済学原理』と直訳することができる。
- (84) 『福沢諭吉全集』第一二、第一三巻。
- (85) 『数字文集』巻の二。
- (86) 千種義人著『福沢諭吉の経済思想——その現代的意義』関東学院大学、一九九四年、二七九頁。
- (87) 新村出編集、岩波書店、一九九八年一月。
- (88) 明らかに宋代李觀の『富国策』のタイトルを踏襲した。
- (89) 中国語の訳名は法思徳である。
- (90) 現代中国語に翻訳すると『政治経済学指南』と直訳することができる。
- (91) 中国語の名前は傳蘭雅である。
- (92) 現代中国語に翻訳すると、『政治経済学』と直訳することができる。
- (93) 中国語の名前は艾約瑟である。
- (94) 中国語の名前は威廉・傑文斯である。
- (95) 『政治経済学入門』と直訳できる。
- (96) 中国語の名前は亞当・斯密である。
- (97) 日本語訳…日本は明治維新以来、世界中に知識を広く求め、著述した有用な書物は数千種類を上回っている。最も詳しく論じているのは政治学、資生学(すなわち理財学、日本では経済学という)である。
- (98) 当時の訳名は「麦喀士」であった。
- (99) 日本語訳…マルクス曰く、現在の経済社会は、実に少数の人が多数の人の土地を略奪することによって形成されたものである。
- (100) 『新民叢報』第一二号に掲載。
- (101) 梁啓超編集の天津『庸報』の第二六・二七合併号に掲載された。
- (102) 『臨川先生文集・上仁宗皇帝書』。
- (103) 『葉適集・財計上』。
- (104) 中国語の名前は麥克文である。

(105) 『孫中山全集』第二卷(中華書局一九八二年)、五一〇頁。

(106) 今日の訳名は『政治経済学批判導言』である。

(107) 分子の変化は化学研究の領域である。

(108) 『東雲新聞』明治二十一年一〇月四日付。

(109) 民国初年、即ち第一次世界大戦前後、中国近代民族工業が発展した時期である。

〈謝辞〉

本稿の日本語訳にあたっては、呉咏梅北京日本学研究中心専任講師(国際日本文化研究センター外国人研究員)のほか王述坤中国東南大学教授(国際日本文化研究センター外国人来訪研究員)、劉建輝国際日本文化研究センター助教にお力添えをいただきました。記して感謝いたします。